

幼い難民に未来を……CYRニュース

第2号

1980年11月20日発行

事務所：〒150東京都渋谷区広尾4-3-1 ☎03-499-1226

普通預金口座：第一勧銀広尾057-1280817 郵便振替口座：東京1-36227



子ども達が帰ってから保育実習の講義を受ける保母さん達。一言も聞きもらすまいと、たいへんな意気込み。(撮影 森板卓士)

いくたの困難乗りこえ

キャンプに根づく保育センター

「幼い難民を考える会」全国の会員からの力強い支援と、「会」から現地に派遣されたチームの献身的な奉仕活動に支えられて、さる6月末、タイ国内カオイダンにある難民キャンプ内で始まった、難民の子ども達のための「保育センター」は、ようやく5カ月目を迎えました。

この間、6月末に起こったタイ・カンボジア国境衝突事件や、7月中旬から実施されたタイ国内キャンプ間の難民の配置替え、大移動などのあおりを受け、生まれたばかりの「保育センター」の歩みは、決して平坦なものではありませんでした。開所当時は、100人近く(午前50人、午後50人)集まっていた子ども達の数も、大移動がピークに達した当時は一時、15人くらいまでへったこともありました。

子ども100人に20数人の保母さん

派遣された「会」のグループは、このような困難な時期にも、熱心に子ども達の保育にあたるカンボジアの保母さん達の心がくじけないようはげましながら、最初にかかげた目標を見失わないようがんばりました。このため、現在は、子ども達の数も、新しいセンターで200人になり、将来「保育センター」の数をどんどんふやすために、いま養成中の保母さん達の数も20数名にのぼっています。

現在、運営されているカオイダン・キャンプ内の第1号「保育センター」は、もともと他の団体が所有している建物を一時借用して開いたパイロット施設であるため、「幼い難民を考える会」では、いずれは計画どおり、保母さん達を養成するための、本格的な養成センター「希望の家」を完成、運営する計画をもっています。ここで養成された保母さん達は、一部はカオイダン・キャンプ内の他のセクションに、それぞれ「保育センター」の2号、3号をつくっていくときの、リーダーになると同時に、他の一部がカオイダン以外のタイ国内キャンプ(サケオ・チョンブリなどが候補にあがっています)に移るのに合わせて、それぞれのキャンプ内にも、つぎつぎと数多くの「保育センター」を築いていくという計画です。

明日知れぬ運命にもめげず

もちろん、計画の前途には、多くの難関が待ち構えています。第一に、資金難です。この計画の実施推進者である国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)自体が、慢性的な財政の乏しさに苦しんでいるようです。したがって、本来は、UNHCRの手で建てられるはずだった「養成センター」の建物も、私たち「会」やその他の日本の協力団体の資金を投じなければ、隔の目を見ないことになるかもしれません。

(この件については、10月にはいってから、ようやく「養成センター」建設の資材が運びこまれて、現地の会員は、やっとほっとしたそうです。)

さらに、「明日はどうなるのかわからない」という、難民キャンプそのものの、きわめて不安定な環境が、「幼い難民を考える会」の保育プロジェクトを、足元からおびやかします。複雑に揺れ動く国と国との関係、駆け引きのあおりをくって、タイ国内のカンボジア難民すべての運命はいつも、もみくちゃにされます。そして「保育センター」のプロジェクトも、荒海の上に加えて小舟のように翻ろうされるのです。

伊東外相や議員団も激励

しかし、多くの困難にもかかわらず、「幼い難民を考える会」の保育センターは、きょうもカオイダン・キャンプのなかで、りっぱに運営されています。さる8月26日、キャンプを訪れた伊東外相も第1号「保育センター」に立ち寄り、元気に遊ぶ子ども達や、熱心に働くカンボジア人の保母さん達の姿に、感動したそうです。

また、それより少し前に現地を訪れた国会超党派の視察団も、「幼い難民を考える会」の事業に関心を寄せ、一行の田英夫議員は「日本人の手によって、難民キャンプの中で、こんな専門的なプロジェクトがすすめられているとは知らなかった」とたいへん感心し、今後の資金援助を約束してくださいました。

このような「幼い難民を考える会」の現地活動のあり方が、何度もテレビや新聞、ラジオなどで報道されるたびに、日本全国から、問い合わせや激励のお便り、電話が、東京・渋谷の「会」の事務局に寄せられ、会員の数も、あいかわらず著実に増加しています。

(10月20日現在 265人)



子ども達は遊びや歌、踊りやお話を楽しみ(撮影 森枝卓士)

“たくましくなったわね”

現地ボランティアの毎日にもゆとり

現在カオイダンでは、「幼い難民を考える会」の4人の現地派遣グループが活躍しています。

4月から現在まで、いいぎり・ゆき代表は、引き続き現地でリーダー役を努めています。(途中2回、短期間帰国)

それ以外のボランティアの方々は、約3ヵ月(長い入て4ヵ月)ごとに交替するスケジュールで、現地に派遣されています。これまでの方々のお名前をあげますと、

広瀬 敏通 (3月27日→6月6日)
 広瀬 麗子 (4月26日→6月6日)
 鈴木 文子 (4月26日→8月22日)
 平野トキワ (5月2日現地参加→8月6日)
 前田 初江 (7月12日→10月10日)
 竹内 恵子 (8月 9日→11月6日)
 秋沢 ヒロ (8月22日→活躍中)
 関口 晴美 (9月29日→活躍中)
 森定なほみ (10月24日→活躍中)
 田口 明美 (11月16日出発)

の延べ9名となります。

現地での1日の生活日課は、およそ以下のようになります。(ただし、8月から9月ころまでの1時期の例です)

AM5:45 起床、食事(アランヤ・プラテート宿舎)
 AM7:30 バスでカオイダン・キャンプへ
 AM8:00→11:30 幼児保育実習の指導
 正午→PM2:00 昼食、休憩、昼寝
 PM2:00→PM4:00 教材製作、手芸教室、
 他団体との連絡、交渉
 PM5:00 カオイダン・キャンプからバスで出発
 PM6:00 買物、宿舎帰着、シャワー、夕食
 PM7:00 会計、行動日誌記録、明日の準備など。
 PM10:00ころ 就寝

ざっと、こういったところです。

宿舎については、初め4月ころ借りた民家は、設備が悪く、生活環境としても不良だったのが災いして、一時はほぼ全員がデング熱で倒れるといったことまで起こりました。このため、7月から宿舎を現在のバーニーさん宅に移しました。(バーニーさんは小学校の女教師、そしてご主人は警官です)ここは設備も十分に整い、快適な環境といえますし、とくに大家さんのバーニーさん一家が、全員ととても親切に気を配ってくださるため、この引越し以後、現地グループ全員は、仕事から帰ってゆっくりと休息できるようになりました。

現地の気候は、もちろん日本より気温は平均してず

っと暑いわけですが、5月から10月ころまでの雨期の間は、日中かなりの頻度でスコールがあり、また、朝と晩は意外に過ごしやすい感じだということです。

現地で活動が始まったころは、なにかもたいへんで不規則な生活を強いられたのですが、最近では、仕事もそれなりに軌道に乗って、ボランティアたちの生活にも、わずかながらゆとりが感じられるようになりました。“全員デング熱に倒れる”という苦い経験を業にして、健康管理にも気をつけるようになり、皆さんの健康状態はおおむね良好です。8月帰国した鈴木さんを迎えて、東京の留守番役たちが異口同音に“たくましくなって帰ってきた”と感じたのが、そのよい証拠です。

今後、現地の仕事が増えます拡大することは、間違いありません。しかし、キャンプの中の保育活動をこれからもずっと長続きさせるためには、もっともって“ゆとり”のある活動スタイルが望ましいでしょう。

そのためには、さらに数多くの方々が、現地ボランティア・グループに参加することが、強く望まれているのです。

幼い難民に母国語の本を

すでに12種類の童話や絵本贈る

難民キャンプの中の幼児保育活動とならんで、「幼い難民を考える会」がとりあげているもうひとつの大きなプロジェクトは、クメール語の絵本、童話の発行と難民の子ども達への配布です。

4月以来すでに12種類の幼児用絵本、クメール語の文字の学習表、小学校学童用の童話など、合計13万4,000部が印刷製本され、バンコクのUNHCR事務所の手をへて、タイ国内各地のカンボジア難民キャンプの子ども達に渡されています。

大部分はキャンプ内の“新刊”

これらのうち、東京のエネスコ・アジア文化センターにたまたまクメール語の版があったのを複製した5種類の本を除き、あとはすべて、カオイダン・キャンプの中で、カンボジアのEDC(難民自身による教育指導機関)の人々の手で新しく執筆、作画、編集された“新刊”です。

とくに、子どものための詩集と童話をまとめたスプアプさんは、子ども達の保育活動にも非常に熱心で、カンボジア人の保母さん達の先頭に立って働くかたわら、現地派遣の「会」のスタッフの強いすすめで、出版に同意しました。彼女は、この9月まで、キャンプの中では「戦争未亡人会」のリーダーとしても精力的に活躍していました。(この「未亡人会」から日本の婦人団体への訴えは、さる7月17日の日本経済新聞・社会面ト

ップで報道されました。)

これらの絵本、童話類の印刷・製本にかかった費用には、「幼い難民を考える会」の他に、この計画に賛同した「インドシナ難民を助ける会」、聖心インターナショナル・スクール初等科の生徒たちから寄せられた寄付、それから外務省のアジア局難民対策室に全国各地から集められた基金の一部もあてられました。

全国から集まった基金で制作

このように「幼い難民を考える会」が、呼びかけ、編集、制作にあたった絵本、童話の本の子ども達への配布は、さいわい多くの人達の共鳴を得て広がり、祖国の美しい自然や母国語の文字を、ともすれば見失ないがらだった、カンボジアの子ども達に、最上の贈り物になりました。

「会」では、引き続き「みなし児ケメラ」(新刊)3万部、「クメール民話集I・II」(複刻、全7巻)各3,000部の印刷を現在計画しています。

続々ニューフェイス登場

現地と全国の活動支える事務局

「幼い難民を考える会」のタイ国内キャンプ内の活躍が、テレビ、新聞などの報道で脚光を浴びていますが、華やかなニュースの蔭に、これらの活動を支えて、東京で「縁の下の支え」の役割をはたしている、事務局の方々の献身的な奉仕、そして全国いたるところで、募金や会の活動のPRに、何百人という人々の努力が積み重ねられていることを、忘れることができません。

夏中も休みなく開いた事務局

4月に開設された、東京・渋谷区広尾の事務局には、その後6ヵ月間、毎日事務奉仕の方々何人ががづめています。事務局の壁には、曜日ごとに割り振って当番で集まってくるグループの氏名が書きだされてあり、このシステムは、7月、9月の夏中も、ついに崩れませんでした。

事務局活動の中心的存在は、まず佐藤和子さん、神保真理子さんのおふたりの主婦です。それぞれが曜日を分担しあって昼間の事務の中心的存在になっております。そして夜間は、関口晴美さんが、この5ヵ月間ほとんど連夜のように事務局に通って、おもに会計を中心とした仕事をこなしてきました。(関口さんは、別項記事のように、9月29日から、現地グループに参加しました。)

事務の仕事の中身は、まず、全国の会員や諸団体との間の通信連絡、全国各地のさまざまなの方々から寄せられる問い合わせへの応待です。それから会計(これが専門的知識を必要として、なかなかたいへんです)。現地派遣ボランティア出発までのいっさいのお世話、現地グループとの通信連絡、現地必要物資の調達、その発送などなど。事務局では、文字どおり連日、休むい

とまもない忙しさです。

延べ数十人の人々の奉仕で

この間には、一時帰国したいぎり代表、あるいは任務を終えて帰還したボランティアの方々による報告会を、主に会員の方々を対象に、3~4回開いております。また、クメール語の講習会や、東京都内における募金活動や、バザーなどの催し(それぞれ、別項の記事参照)も、事務所を中心にそれぞれ参加者の創意によって進められております。

現在、事務局活動を支えているメンバーは、延べで数十人となり、個人で熱心に通ってきている方々も多いのですが、地域とか同窓会の仲間とか、もともと社会奉仕を目的に集まったおかあさん達のグループのいくつかが参加しています。聖心女子大や独協大のように、学内のサークルも常連メンバーです。おかあさん達は、たまたまお子さん達を幼稚園に通わせている中で、難民の子ども達の境遇に心を寄せ、学生のサークルは、実践の中でボランティア活動と、国際問題の現実に向きたいという知的な関心からと、「幼い難民を考える会」への関心、参加への動機もいろいろあります。

いつもさわやかな雰囲気 いっぱい

このように、事務局で連日見かける顔ぶれも、実に多様、あるきまったタイプの人々に固まらず、さまざまな職業、年齢、性格の人々がミックスしているのもこの「会」の事務局の特徴でしょう。しかも、絶えず新しいメンバーを迎えて、フレッシュな気分にあふれています。

よく他の団体や、報道機関のジャーナリストが事務局を来訪されるたびに、「この雰囲気は、いわゆる“団体臭”がなくて、実にさわやか」と、きまって感心していかれます。事務局の、比較的古顔のメンバーでも、何かの都合で1~2週間、事務局にごぶさたしていると、その間にかならず初顔のメンバーが何人がふえている。それが、ひとつの楽しみになっているのです。



事務局でいぎりさんを囲み、現地の苦勞話に耳を傾ける。

耳から学ぶクメールの心

クメール語講座、初級から中級へ

「若い難民を考える会」の国内活動の一環として、クメール語の講座が開かれています。先生は、東京工大に留学しているカンボジア留学生、サム＝フィさん。3月から7月まで、10名ほどの受講生が参加して、第1期クメール語初級コース（基礎的な文法と会話の習得）を終了しました。

引き続き、やはりサム＝フィ先生指導で、10月3日からは、クメール文字の読み書きを含む中級コースが開講しました。また、初級コース再開の希望に答えて、今度は、女子留学生ベン＝セタリンさんの指導で初級コースもまた近くスタートします。これから、クメール語を第一歩から始めてみたい方は、ぜひ事務所へご連絡ください。聴講費は、初級も中級も、毎月1,000円。クメール語講座の幹事は、このニュースにクメール語について寄稿されている独協大の金田行幸さんです。

講座は、毎週金曜日の夜7時から。「会」の事務所に近い聖心女子大のアセンブリ・ホールが教室で（都合によっては事務所で開催されることも……）受講生はみんな熱心に、サム＝フィ先生に合わせて、まず発声練習。

「キニヨム・カンポン・リエン・ピサ・クマエ！」

（私は、今、クメール語を勉強しています。）

これが、なかなか難しい。次に、クメール語を日本語に訳すとすると、またひと苦労。むしろ、日本語そのものの難しさに、あらためて気がついたりして、難しさの中にも思わぬ楽しみがありました。

なにしろ、日本国内で、なまのクメール語に触れられる貴重な機会とあって、聴講生全員、熱心に先生の話すことばに耳を傾けます。

中級に移ってからは、小学校一年生よろしく、文字（ひと目見るとはたしてこれが文字かと思われるほど複雑な記号）の勉強です。しかし、これからは、いよいよクメール語の本格的マスターに乗り出すわけです。

未知の言葉の世界に出合うことを望まれる方、どうぞ、ひとりでも多く、再開される初級コース（こちらは毎週木曜の予定）に、今からでもお申し込みください。



黒板の文字にいくような眼ざし。

全国各地でキャンペーン

街頭募金、バザーから学園祭まで

現地キャンプ内で続けられている「保育センター」の運営資金集めと、「若い難民を考える会」の活動PRを兼ねて、全国のあちこちで会員を中心とするキャンペーンがくりひろげられています。

まず街頭募金は、5月2日を第1回目として、5月から7月までは東京銀座・数寄屋橋角、9月は場所を東京・渋谷駅前に移し、雨の降らないかぎり、毎週日曜日午後、会員有志数名ずつが参加して行なわれました。初めは、なかなか大きな声も出なかった募金「初体験」の会員たちも、しだいに慣れて、道行く人々に「会」の目標と仕事の内容を訴え、寄金を求めました。

熱心に耳傾ける通行人も

募金に応ずる人々の表情にも、初めのころとくらると、少しずつ変化がみられます。とくに、6月、7月にかけて「若い難民を考える会」の活動が、いろいろな形で報道されるようになってからは、わざわざ足をとめて、会員の説明に熱心に耳を傾けて行く人々もてきました。

街頭募金とならんで、会員が盛り場やデパートなど、人のよく通る場所にお願ひし、募金箱に写真、パネルなどをそえての募金方法も、あちらこちらでとられています。

資金獲得のためには、あちこちの会員が中心になってバザーも開かれています。その圧巻は、東京・広尾の事務局わき、聖心インタナショナル・スクール前で開かれた、2度の大バザーです。

1回目、6月8日はあいにくの雨天にもかかわらず、会員の持ち寄った衣類、日用品類、寄付していただいた品物などに大ぜいのお客さんが集まり、会員の熱心なサービスで、30数万円の売り上げになりました。

秋晴れの好天に売れゆき上乘

続いて2回目は、10月5日同じ場所で、今度は、幸い秋晴れの好天に恵まれ、出足は上乘、収益は60数万円と倍加しました。この時は会場近くの事務所で現地の活動を写したスライドと現地活動を終えて帰国した鈴木文子さんの話で、報告会も行なわれました。

事務局を中心としたバザーの他に、全国あちこちの会員が所属する幼稚園、保育所、学校、教会、ボーイスカウトなどのいろいろな催し、バザー、学園祭などでは、それぞれ一角に「若い難民」コーナーを設けて、写真の展示や説明をつけて募金を訴え、集めた資金はつぎつぎと東京の事務所へ送られてきました。これらのキャンペーンには、この一回のニュースでは収めきれないほど、多くの場所、多くのグループが参加しています。

このような募金活動の成果は、4月以来現在まで、1,800万円に達しています。

CYR FORUM

このFORUMは、会員みなさんの討論と探求のための広場です。

第2号では、まずクメール語講習会の幹事をしている金田さんから、クメール語についてのエッセイを、いただきました。

リェン・ピサ・クマエ・ピバ・ナ！ (クメール語の勉強は難しい！)

金田行孝

すでにご承知かと存じますが、「若い難民を考える会」は、毎週一回、クメール語講座を開いています。これまで今年の3月から7月までの間に、基礎的な文法と会話の習得を目標とした初級コースを終了いたしました。10月からはクメール文字の読み書きを含む中級コースが開講され、さらに初級コースも新しい聴講生によって、再び開講される予定になっています。

さて、カンボジア人の母国語である、クメール語 (phisa khmer: ピサ・クマエ) とはどんな言語でしょうか。ここで簡単ながら、その特色をあげてみたいと存じます。

phisa kampuchia (ピサ・カンブチア) とも呼ばれるクメール語は、カンボジア国内に歴史的に長く居住しているクメール民族以外の民族にも使用できる者が多く、またクメール・ルーと呼ばれる山岳地帯に住む各少数民族の間にも、徐々に普及し始めていて、本来のカンボジア全人口の80パーセント以上を占める、クメール民族の固有言語であるのみならず、カンボジアの国語となっています。(ただし戦乱によって、現在のカンボジア国内の民族構成などは大幅に変化してはいるかと思えます。)

系統的に見ますと、クメール語はビルマ南部のモン族のモン語と共に、オーストロ=アジア語族のモン=クメール語系に属するとされ、南部インド系の文字を使用した記述が、7世紀以前の古碑文に見られるところから、かなり古い時代から、使用された言語であるといわれています。

アンコール・トム、アンコール・ワットが創建された時代、すなわち9世紀の初頭から12世紀末の間、その全盛を誇った古代クメール王朝期(アンコール時代とも呼ばれる)には、サンスクリット語の影響を受け、またその後15世紀ごろからはシャムの影響を受け、小乗仏教の伝来と共に、バリー語の影響を受け、クメール語は抽象語を充実しました。現代になっても、科学技術、社会の進歩に伴ない、前述の二つの言語からの借用、また英語、仏語の影響も受け、新語の造語が行なわれてもいたようです。

現在使用されているクメール文字の源は、アソーカ王文字の系統に属し、ビルマ文字、ラオス文字、タイ文字、インドのデーヴァナーガリー文字などと親類

関係にあります。

クメール文字の表記は、たいへん複雑に感じられますが、やはり一種の表音文字で、子音字33個、母音記号23個で構成されています。一般にクメール語では母音記号は文字とはみなされず、普通子音字と組み合わせられて、はじめて音を表現することができます。また子音が続く場合、後の子音の表記に「足文字」とよぶ字体が使われることも多く、この子音字と母音記号と足文字を、あたかも組木細工のように組みあわせ、刺繍のような独特な美しさをもった書体を形づくり、音を表現します。

文法的に見ますと、英語などインド=ヨーロッパ語族と同じく、主語+動詞+補語、目的語の語順を示しますが、特色として、被修飾語+修飾語という形をとる事、つまり、たとえば、「私の荷物」と言うとき、「荷物・私」となるわけで、また、格変化、語尾変化(1がmyなどに変化すること)もありません。ですから、英語などの素養でもあれば、クメール語の文法は比較的容易に理解できるようです。

しかし、クメール語の発音は、英語などより難しく、音の少ない日本語を使用するわれわれ日本人には、なかなかたいへんです。また、なんといっても、前述のクメール文字の習得は至難の業で、今勉強している私達も当分、文盲の苦しさを味わいそうです。アルファベット表記でもないかぎり、辞書すら引けないのですから。

しかし、ある民族が他民族と何かしらの交流を持つ場合、相手方の文化と社会の根幹である、彼らの言語を理解する事は、不可欠であると言っても過言ではないと存じます。当会の国内活動に携わる場合など、たとえその交流、接触が間接的である場合でも、われわれが今、力をいれている活動の、成果が生かされることとしている土地=カンボジアに生活する彼らクメール人の考え方を、そしてそれを支える言語をある程度でも理解することは、彼らに対してより親近感を感じさせ、海を越えた協力への意識にも新しい光を当てることとなろうと思えます。

皆が求めて止まない世界平和も、人々の相互理解があつてこそ、はじめて実現への一歩を踏みだせるのです。現地活動に参加する予定のない方であっても大歓迎です。クメール語を勉強してみたいという方は、ふるって当講座に御参加下さい。では最後にクメール語で、チュム・リエブ・リア！(さようなら！)

参考資料：カンボジア語入門

共編 今川幸雄・福島清介

出版：日本カンボジア協会

クメール文字の見本
リェン・コーコー(文字の勉強)

キャンプからの声

難民キャンプの保育活動に、直接参加した現地派遣メンバーから、全国の会員のみなさんにお伝えする生々しい現地の便り、感想、提案などを、今後、この欄でご紹介します。

この号では、8月中の一週間、短期間ながら現地を視察した藤松恵さんと、4月から8月までの4ヵ月間保育活動のスタートから活躍してきた鈴木文子さん、このおふたりの報告です。

難民キャンプでの7日間に感じたもの

藤松恵

「幼い難民を考える会」が目標として掲げた活動が、時間の経過とともに、さまざまな姿で具体化してきました。幼い難民の子ども達は、まちががなく、毎日の生活を積み重ねていくことによって、「自立する人間」として育つ方向をつかんでいこうとしています。

しかし、子ども達が毎日の生活をどう満ちし、積み重ねていくかは、やはり、難民のおとな達のおかれています「状況」に、大きく左右されます。私が、わずか7日間のカオイダン・キャンプでの見聞の中から感じたものを少しお話ししたいと思います。

現地で活動している「会」の人々と、難民キャンプに収容されている人々との間では、急速に「助ける者」と「助けられる者」との立場の違いが消えつつあります。多くの時間をかければかけるほど、おたがいに同じ生活感情を共有するようになり始めています。

難民自身がまったくつかむことのできない、彼らの将来の不確実さ、苦難の予感（当面の衣食住こそ、外国からの善意の援助によって目に見えて改善されましたが、将来への展望となるとなにとつ約束されていません）が、私達の心の中にも暗い重しのように沈みこみます。

私の会ったカオイダン・キャンプの難民のうち、20才代の青年達は、第三国へ行くための英語（ある時は日本語）の勉強に励んでいました。もちろん、第三国へ行けると決まった人達ばかりではありません。自分の意志で自由に、キャンプを出入りできない彼らの生活といたら、気が遠くなるほど外界からの刺激がありません。

自分の生まれ育った国を追い出され、言葉の通じない他国の山奥に身をおき、その国の兵士に24時間中、監視された中から、しかもその立場に「根づく」ことすら赦されない彼らの生活の中から、いったい、どんな「将来」を考えられるというのでしょうか。

このような不安と流動の中で、「幼い難民を考える会」の目標も、ややもすれば影を失いそうな恐れもあります。

しかし、このような「状況」の中にあっても、なお、

いまカンボジアの難民にとって何が真に必要なかを真摯に考え、それを実現するために全力をかけて努力する人達を見出すとき、私はそこに人類の勇気と希望を感じたのでした。

分裂から和解へ、不信から信頼へ、破壊から建設へと、カンボジアの人達がひとしく願い実現を夢見ている希望を、彼ら自身といっしょになって現実化していく。その可能性をあくまで信じて努力し続けていく中で「幼い難民を考える会」の目標は、やがて現実の姿をとり、誰の目にも不動のものになるでしょう。

戦争が残したもの

鈴木文子

「戦争」これほど残酷なものが他にまだこの世にあるでしょうか。戦いは必ず人を傷つけ、そして自分も傷つきます。多くの人が命を断ち、苦しみます。

カオイダン難民キャンプの人たちも、戦争によって傷ついた人たちです。戦後生まれの戦争を知らない私ですが、彼らの痛みはイヤというほど感じました。

両親を失ない、友人を失ない、知人を失ない、健康を失ない……。

失なうことがあまりにも多すぎます。

なにもかも失なった彼らをここで待っていたのは、飢えと病気でした。今では、世界各国からの救援活動によってどん底からようやく遠いあがり、しだいに元を取り戻しつつあります。特に子どもたちは持ち前の限りないエネルギーを燃焼しはじめています。

明かさを取り戻した子どもたちですが、まだまだ多くの面で飢えています。物質的にもそうですが、精神的な飢えは目に見える形では現われにくいだけにほんとうに恐ろしい気がします。

子どもの生活は周囲のおとなたちの考え、行動によって大きく左右されます。何が子どもにとって大切なのか、必要なのか、キャンプに行き考えさせられました。なんの罪もない子どもたちが、飢えに苦しんでいるのを見ると無性にハラがたちました。

私は心の底から願います。あの子たちが、あの苦しい体験を人生の糧とし、たくましく成長してくれることを……。

そのためには援助の手が必要です。今からでも遅くはありません。彼らの痛みを感じ、私たちにできることをするのです。

なによりもまず「幼い難民を考える会」が今取り上げている保育活動を、なんとしてもこれからずっと続けて行かなければなりません。それが現地から帰って私が痛切に感じていることです。そして最大の願いは、この世から戦いがなくなることです。

「幼い難民を考える会」運動方針 1980. 2. 17

- I. 幼い難民たちのために、「希望の家」(仮称)を現地に作る。
 1. 現地状況の調査、日本への報告。
 2. 現地へ代表作業グループの派遣。
 3. 現地で保育施設の開設。
 4. 成人難民から選り出して保育職員の養成、その指導。
 5. 教材遊具類の調達(現地自給のための資材の確保、製作の指導)
- II. 「希望の家」(仮称)を、難民キャンプ内コミュニティの生活自立のためのセンターにもする。
 1. 他の難民救援団体、機関と、現地で協調、協力する。
 2. 成人難民の生活学級への協力。
- III. 身寄りのない子どもに里親をみつける。
 1. 現地で養い親をみつけ、その養子受け入れを援助する。
 2. 日本国内でも、養い親希望者と孤児との結びつきをあっせんする。
- IV. この運動を長続きさせるよう努力する。
 1. 永続的な資金確保のための活動。
 2. 国内へのたゆまぬPR。
 3. 他の国内諸団体、機関との連絡、強調。これらの団体によって構成される連絡協議機関への参加、協力。

事務局からのお知らせとお願い

1. 現地行きボランティア求めています。

ニュースにもありましたように「幼い難民を考える会」では、現地キャンプの保育施設で、カンボジアの保母さん達の指導やお手伝いにあたる派遣ボランティアの参加を、全国の皆さまに訴えています。

会の本部には、8月から「ボランティア選考委員会」が発足、各地から寄せられる参加希望者と面接、ご本人の意志、周囲の条件、健康状態などを参考にして、ぜひ現地へ行っていただきたい方を、選びだしています。

現地活動参加のための最低条件は

- ①健康なこと
- ②英語会話については、十分な聴取力と日常会話でいどの表現力をもつこと(フランス語だったらベスト)
- ③最低3ヵ月間、現地に滞在できること、

の3点ですが、望ましい条件としては、これまで保育園、幼稚園、小児科病院、小学校低学年など、幼い子どもを扱う職域においてになった方だったら、なおベターです。

しかし、現地へ出発される前、若干の期間、東京足立区、梅田「子どもの家」の保育に実際に参加していただき、基礎知識をつけて行きますので、未経験の方々でも参加することは可能です。選考委員会で選ばれた方々の、現地派遣準備費、渡航費、現地滞在費などは、すべて「会の負担」ですから、経済的な面でのご心配は無用です。

これからでも、参加ご希望の方々は、至急、事務局へご一報ください。さっそく、選考の手続きをとります。さしあたって、12月から来年の3月ころまで、現地に滞在可能な方を至急、求めています。

2. CYR Tシャツのお知らせ!

「幼い難民を考える会」のマーク入りTシャツができました。現地活動で、また街頭募金の際などにも大いに役立てたいと思います。購入を御希望の方は、どしどしお申し込み下さい。デザインは2種類、サイズはM、Lとあります。申し込み用紙に、希望のデザイン、サイズ、枚数を記入し、代金(1枚1,200円)、郵送料(1枚につき切手200円分)を添えて、現金書留にてお申し込み下さい。なお、ゆったりとしたTシャツですので、女性でしたら、かなり太め(?)の方でもMサイズで充分です。



〈デザイン A〉

〈デザイン B〉

* A Bともシャツの色は白 * Aの文字とマークはグリーン、Bの文字とマークは赤と青の2色刷り

第1回定期総会を開きます

2月17日の発足総会から9ヵ月たちました。現地の保育施設もどうやら根づいた段階で、これまでの活動のまとめと今後の態勢がためのために、全国の会員の意見を集約する、第一回定期総会を開きます。

日取りは11月23日(日)の午後1時半から、東京・広尾の聖心女子大キャンパス内の宣代会館が会場です。主な議題は

- ①現地および国内の活動報告
- ②この期間の会員報告
- ③規約改正
- ④役員改選